

斎藤茂吉に於ける「日常」性の位相

—「遠遊」「遍歴」を中心として—

安 森 敏 隆

「遠遊」「遍歴」はわかりやすい歌集である。と同時に誠に複雑な歌集でもある。そのわかりやすさは茂吉自身「後記」でいっているように「歌日記程度」のものにすぎないという内容のわかりやすさからくるものであり、その複雑さは成立事情の一点にかかっているといつてもよい。茂吉における十七歌集のうち「遠遊」「遍歴」の位相は、製作時期、編輯時期、刊行時期その一つ一つの成立事情の内部構造にまで立ちいたってみるとき、誠に特異な位相にあることが解る。問題はこの三つの関係性を個々別々にみると同時に、

総合的にとらえる視点を獲得しないと、どんなでもない迷路に入れてまわってしまうおそれがある。なかでもこれからとり上げようとする「遠遊」「遍歴」さらには同時期に編纂された「つゆじも」は、この三つの関係性をもっとも大きくずれた複雑な歌集である。

それぞれの後記を読む限り、「つゆじも」「遠遊」「遍歴」の三歌集は、昭和十五年の夏にまとめて編輯したということになる。そこで昭和十五年夏の茂吉日記をみると、七月二十三日の「為事手ニツカズ、ソレデモ手帳ナド見テキル」から八月十四日の「南山歌一

読」に至る期間に、「連山」（昭和五年十月から十一月にかけて満鉄から招かれて満州の各地を巡遊した折の一連）の歌の編輯をしていることが解る。そして、それに引きつづいて「つゆじも」の編輯に精を出している。

○南山歌一読○ウインノ帳面ヒラヒヨム。感慨深シ。（昭和十五年八月十四日）

八月十四日の日記に一箇所「ウインノ帳面ヒラヒヨム、感慨深シ」のドイツ留学中の記事があるのみで、あとは八月二十四日から八月三十一日の一週間は「つゆじも」の編輯をしている記事のみである。この八月十四日のみで「遠遊」「遍歴」あわせて千四百五十一首の歌の編纂を終えたとは到底考えられないし、文字通り「ウインノ帳面ヒラヒヨム」ということだけだったことであろう。そしてこの昭和十五年は、かつて何度もこころみた第三歌集「つゆじも」の編纂を、最後の「洋行漫吟」（一〇七首）のみを除いて最終的に仕上げたと思われる。そして茂吉日記を綿密におってみると、「遠

斎藤茂吉に於ける「日常」性の位相 —「遠遊」「遍歴」を中心として—

遊』『遍歴』の編纂のおおよそは翌年——昭和十六年の夏になされ
ていることがよくわかる。

○ウイン日録ノソキ見ル（昭和十六年七月三日）

昭和十六年七月三日以降の茂吉日記をおっていってみると、だ
いたい「遠遊」「遍歴」の歌の順序にそって歌稿を整理していったこ
とがわかる。具体的には、最初の七月三日と七月六日は漫然と維也
納、ミュンヘンの帳面を見るにとどまり、七月十一日から本格的に
歌稿整理がはじまっている。そしてこの七月十一日、七月二十三日
の間が「遠遊」の編輯にあてられ、七月二十四日、八月十日の間が
「遍歴」編輯にあてられたということになる。一応「遠遊」「遍歴」
を「製作時期」「編輯時期」「発行時期」の三つの点にそって整理
してみると次のようになる。

項目 歌集名	製作時期	編輯時期	発行年月日
「遠遊」	大正十一年一月 ～ 大正十二年七月	昭和十六年 七月三日 ～ 昭和十六年 七月二十三日	昭和二十二年 八月三十日
「遍歴」	大正十二年七月 ～ 大正十四年一月	昭和十六年 七月二十四日 ～ 昭和十六年 八月十五日	昭和二十三年 四月五日

すなわち、大正十年代——四十歳そこそこの茂吉がつくった歌を

二十年もたった昭和十六年——六十歳の茂吉が編輯し、さらに戦後
の昭和二十二年と二十三年——六十六歳と六十七歳の茂吉が出版す
るという成立過程における大きなギャップである。そこで当然問題
になるのは、製作時期のヨーロッパ留学中という特異な環境と編輯
時期の昭和十年代の戦時下の日本という特殊な状況と発行時期の戦
後という問題が顕現してくるのであるが、これは後段にゆずる。

先の引用の日記中、八月九日の記事を見ると「維也納ノミ（三百
三十首旅ヌキ）、ソノ以外ハ八百三十一首、合計一千二百六十首ナ
リ」とある。特に「維也納ノミ（三百三十首旅ヌキ）」の意味を「遠
遊」中の「獨逸旅行」（一〇二首）、「伊太利亜紀行」（一〇八首）
「ドウナウ下航」（一九首）、「ブダペスト」（一一首）の二百四十
首ばかりが未だ完全に整理出来ないで保留した、とすると現存す
る「遠遊」（六二三首）、「遍歴」（八二八首）の歌あわせて千四百
五十一首中、旅ヌキの千二百首ばかりの歌の整理が一応この七月十
一日以降八月十日迄の一月間に出来たことになる。一日平均四十首
前後の整理「増補」をしたということになる。

ところが、茂吉のヨーロッパ留学中のもは「斎藤茂吉全集」で
みても、現在資料としては「手帳六」～「手帳十五」のわずかしか
残されておらず、それも「手帳十三」「手帳十四」を除いてそのほ
とんどが講義筆記及び覚書き程度の簡単なメモで、この間の歌の発
想の原型をのぞきみることは到底出来ない。この間、この「手帳」
の他に彼の日常の一日一日を刻明にうつす「日記」風の帳面があっ
たことが推定出来るのであるが、これは今日ではみることは出来な
い。とすると「手帳五」の刻明な「日記」風メモ帳の残された最後

の大正十一年一月十一日を最後として、「日記」の冒頭の大正十三年十一月三十日までの約三年間弱の茂吉の行動と思考の軌跡は完全にわれわれの想像力の範疇にゆだねられることになる。

岡井隆は岩波文庫本『斎藤茂吉歌集』一冊のみを徹底的に鑑賞し、想像力を最大限にたくましくして次のような仮説を述べたことがある。

長崎の茂吉は歌をあまり作らなかった。それはそれで当時の茂吉の必然の結果というものであった。同じくヨーロッパ留学中の茂吉も歌をほとんど作らなかった。(岡井隆「茂吉の歌あるいは抄」傍点筆者)

「遠遊」「遍歴」及び「つゆじも」の中の或る部分は、これは材をその時代にとつたというだけで、実は昭和十年代半ばの作品である。そのことを私は信じて疑わない。(同前・傍点筆者)

岡井説の骨子をたどってみると、「遠遊」「遍歴」(「つゆじも」の部分)はその製作時期である大正十一年一月〜大正十四年一月の間のヨーロッパ留学中につくられておらず、実は材料だけをその時代にとって昭和十年代半ばにつくった「一種の偽書」だということになるのである。すなわち、「遠遊」「遍歴」の複雑さは、「製作時期」と「編輯時期」を一単切り離した上で、さらに昭和十年代のある時期に製作時期と編輯時期が重ねられるといった不可思議な操作

斎藤茂吉に於ける八日常✓性の位相 — 「遠遊」「遍歴」を中心として —

作のなかにおかれることになるのである。はたしてそのへんことは単なる空想のみでなく、どの辺まで実証できうるのかを残る資料類から演繹していつてみたい。

斎藤茂吉先生が独逸留学からの帰途、巴里に立寄って暫く滞在するから、という通知を日本から受取った。(中略)

外国に来て四年間全く歌から遠ざかっていたことを、しばしば嘆じられた。「西洋のものは短歌には盛れない。此方に詩というものが生れたのは必然性がある。詩なら何とか出来そうで、時々そんな形のものも試みてみたが、歌は出来ない。俺は歌を怠けたのでなくて、出来なかつたのだ。それに医学の勉強に来たのでネ。」そんな感想を繰り返えし語られた。私は歌作にも詩作にも体験がないまゝ、「そうかなア」と思った。(宮坂勝「シゲヨシ先生とモキチ先生」)

この文章の中で語った茂吉の言葉を信用する限り、彼は「四年間全く歌から遠ざかっていた」ということになる。この期間は先ほども指摘したように雑な手記のみで、日記が残されていないので、この間の唯一の資料である書簡をみると次のような箇所が目につく。

君が実に勉強してくれるので、忝い。今の僕は到底だめだが、ゆるしてくれたまへ。そのかはり医学の方は非常に勉強している。(「島木赤彦宛書簡」大正十一年十月十五日)

僕は歌はだめだ。帰朝したら又歌が出来るかもしれない。

〔「中村憲吉宛書簡」大正十二年十一月二十六日〕

僕は歌は作れなくて、恥かしい。（「杉浦翠子宛書簡」大正十三年二月七日）

小生はアルバイトに氣をとられて、全々歌作に遠がり候も、あゝいふ下手な歌を見ると、まだまだ負けぬといふ氣がおこり申候。（「中村憲吉宛書簡」大正十三年二月二十日）

多少、手紙という形式からみて、オーヴァーな面があるとしても、この期間茂吉は歌作に熱心でなく歌が出来なかつたことだけはたしかである。歌作に熱心でなかつた分だけ彼は実験医学の論文完成に熱心たりえたのである。歌作の方は引用文中「今の僕は到底だめだ」「僕は歌はだめだ」「僕は歌は作れなくて」「全々歌作に遠がり候」とヨーロッパに来て歌がつくれなくなつたことをなげいている。だが、このことは茂吉の心の深層部にまではいつて考えてみると、一概に歌を忘れ歌をつくらなかつたという風にだけ解釈することは出来ない。

光陰矢の如くどうも氣がいそぎます。歌を作りたいと思ふことも極くたまにはあります。（「中村憲吉宛書簡」大正十二年三月二十八日）

僕は歌は当分駄目だ。一句一句ぐらゐづくの未成品など、帳

面のどこかにかいてあつたりしたが、まとめる時間がない。実にひどい。（「中村憲吉宛書簡」大正十二年十一月二十日）

歌をつくりたくなることが度々あります。しかしそのまゝ消えて形になりません。これは暇のないせいです。（「平福百穂宛書簡」大正十三年二月十七日）

本をしみじみと読むことすら出来ず候。歌ごころも極めて稀に湧き候。それが歌とならずにしまひ申候。（「久保田俊彦宛書簡」大正十三年四月十四日）

茂吉はつねづね歌をつくる衝動の稀薄さについてこのようになげいている。「未成品」はあるが、それをまとめる時間が無いといひ、ひとえに暇の無いせいになっている。研究室がよいのせわしさの中で茂吉は歌をつくる暇が無いというよりも心の余裕をうしなつていのである。ヨーロッパに来て茂吉のなかの「医師と歌人はところを^{註(三)}かえ」ということになるのである。だがさらに綿密に手紙をみる限り、茂吉の歌人への執着はこの期においてもまことにすさまじい。毎日のように「アララギ」の到着を楽しみにし、日本における歌壇の裏話しをたのしみにし、又自分の歌人としての名声を氣にして新聞の切り抜きを送らせ、さらに何よりも歌人仲間からの手紙を楽しみにしている。「輝子から来る手紙と画伯と赤彦から来る手紙は非常に嬉しいのです」^{註(三)}と平福百穂に言ひおこっている。現存するこの期間の茂吉の手紙は、当時ドイツにあつて世話をしてもらつた

前田繁三郎への手紙は別格として、島木赤彦（久保田俊彦）と平福百穂への手紙の数は他を圧倒している。その他、中村憲吉と杉浦翠子への手紙が目につく。茂吉はそれらの手紙を通じて、歌の出来ないう稀薄な心をなげいている。「歌は当分駄目だ」といいながら、実は歌をつくる気持が始終茂吉をとらえていたことをここでは逆に読みとっておかねばならない。だが、ここで言うようにそれらはほとんど「未成品」のままで帳面のかたすみに記される程度のものであった。

先日、復活祭の休日には西ドイツの山地にまゐりドナウ（ダニウブ）川の源をさぐり申候。田舎ゆゑ、歌ごろなど湧き三つばかり拵へたりいたし候。（「平福百穂宛書簡」大正十三年十月二十七日）

落葉が深く、それに「しぐれのあめにぬれにけるかも」です。（「杉浦翠子宛書簡」大正十三年十月二十八日）

この手紙でみる限り、茂吉は大正十三年にはいって少しずつ歌の回復をしていることがわかる。それもドイツにあって、研究のあいまをつかって旅行をくわだてた日々の中で歌が回復し、つくられていったことがわかる。そもそも茂吉にとって、留学自体が大きくなって旅であった。そうした中であって、もともと大きな旅は大正十三年十月二十七日東京をたつてドイツにつくまでの航海であり、大正十三年十一月三十日にマルセイユをたつて日本に帰ってくる航海で

斎藤茂吉に於ける八日常✓性の位相 — 「遠遊」「遍歴」を中心として —

あった。その間茂吉は何度かドイツ、ウイン、ブダペスト、フランス等の小旅行をこころみている。こうした日々、研究をはなれて茂吉の心に歌心がきざし、歌がつくられていったこともたしかである。とすれば、私はその歌の原型をどこにもとめ、どこからみたらよいのであろうか。それはやはり茂吉の「日記」および「手帳」類にもとめられねばならないだろう。そして先ほども引用した昭和十六年の日記の中で「遠遊」「遍歴」の編輯をするにあたって、茂吉がつかった「整理」「増補」の真の意味について考察せねばならない。茂吉自身がヨーロッパ留学中の「日記」「手記」等の原型から、どの程度「整理」「増補」したのかという問題がここにいたってうかびあがってくるのである。

二

現存する最初の日記「日本帰航記」は「手帳の性格と日記の性質を両方もっている」と岡井隆がすでに指摘したように、茂吉の日常性を全体的にささえる手帳の役割と日記の役割を同時に兼ねそなえたものである。

○歌ヲ一首作ラウトシタガ到底纏ラナイ（大正十三年十二月六日）
○海上ニ降る雨ガ歌ニナルナド、思フ（大正十三年十二月二十一日）

茂吉における日本への帰航は即「医者から歌人」への回帰の道でもあったようである。茂吉は船上にいて一日一日綿密に移りゆ

く風景を描写してゆく。歌うべき対象たる自然と歌うべき主体たる自己のかすかな出あいの予兆でもあった。日記へ記帳する言葉は、おのずと五七律を基本におきながら五句三十一音の形式の阻止とせめぎあいながら短歌性を獲得してゆく。風景を機械的に写しとろうとする筆は、おのずと五七律の方へひっぱられ短歌性を回復してゆくようである。だが茂吉のなかのあせりは「歌ヲ一首作ラウトシタガ到底纏ラナイ」というかたちで未だ完全に回復してはいない。一応この期に完結し、「遍歴」におさめられたものとしては次のような作品があげられる。

689 あぶらなす海にくろぐろと附き来る海豚の群は平凡ならず

(「十二月七日、紅海」)

茂吉は大正十三年十二月七日の「日本帰航記」の中に「あぶらなす海に黒くひかりいるかがいくつもゐたりけるかも、コノヤウニ作リテミタガドウモ調ベヲナサナイ。シバラク歌作ヲ休ンデキタセイデアツタ」といつている。この作品になると一応原型は五七五七七のリズムと抒情性を獲得した完成歌になっているのであるが、未だ本来のリズムを獲得するまでに回復していないことを彼自身もなげいている。そして帰国後、下旬の叙述を「平凡ならず」という端的な言葉で把握させるところまで、改作して歌集に採用している。だが一方で、大正十三年十二月二十六日の「日本帰航記」にみられるように、「とどろける支那海のうへに幽かなる月の見るるをわれも見にしか、ドウモ旨クナイガ、コレハ帰国ノ上ニ直ソウ」といいな

がら、ついに歌集に載せられることなく放擲された歌も数首ある。ついで茂吉の「日本帰航記」の中で歌の体をなしてきているのは、「長江ニ雪ミダレフル。にこれる水の上に雪が降つてゐるト云フヤウナ一種ノ氣持が出テキテ、歌ナリサウデアツタ」という記事をもみてもあきらかなように、まさに歌になりそうなフレーズの一節のみがとどめられているものである。こうした気持はすでにマルセーユ出発の時点からきざしていたものであった。

670 あふりにかに日が入ればあらびあの空あかしこの表現をわれは楽しむ
(「十二月五日、ポートサイド、スエズ運河」)

この原型を「日本帰航記」から調べてみると、航海にはいつてもない十二月五日の「あふりにかに日が入ればあらびあの空あかしナド、云ツタリシタ」という記事に対応する。歌人茂吉の抒情の擡頭がここからみえるのであるが、未だ原型では最後のところで短歌性を獲得するまでには止揚せず、歌になる途中で放擲したものである。「遍歴」中の「この表現をわれは楽しむ」は、時期すぎて昭和十六年の茂吉が完全に自己の壮年時代を対象化し、その時の感激を冷静に対象化した時にはじめて出来たものであり、それにともない上旬の平凡なフレーズもよみがえってきたものである。さらに十二月九日の「日本帰航記」をみると、茂吉のこうした歌にしようとする姿がうかがえておもしろい。

午後四時ゴロ、波立ツテキル海ノ上ニ白イ町ガ見エタ。日光

ヲ受ケテ眞白ニ見エル。コレハ Mokka ノ町デアツタ。望遠鏡
 デ見ルト白イ家ノ間ニ寺院ノ尖塔ノヤウナモノモ見エタ。ソレ
 カラカスカニソノ右手ニ陸ガ見エル、ソレハ丘デアル。ソノ
 向ウニ山ラシイモノガ見エルガ草木ガナイヤウデアアル。○波の
 へに Mokka の町の白き家見ゆ。○紅海いまに盡きんとして
 Mokka の白き町見ゆ。波だてる紅海のうちへに日に輝されし白
 き町見ゆ。南のかぜはいたく強しも。○波のうちへにかすかに白
 く見えわたる町も見て居れば心さびしも、心なごむも。心寂し
 きごとし。(「日本帰航記」大正十三年十二月九日)

この箇所を原型として成立したものととして、次の歌が浮かんでゐる。

695 南より吹く風いたみ波だてる海のへに Mokka の白き町見ゆ
 (「十二月九日、十日、紅海をいづ」)

だが、これまで述べた先の完成歌、ないしはここでとりあげた未
 完成歌の域の歌が「遍歴」に採用された作品ということになるとわ
 ずかしかない。茂吉はこの期、「歌人であるよりも医者」であり、歌
 の創作をほとんどしていない。それではいかなるかたちで「遠遊」
 「遍歴」の大部分の歌の原型を今日みることができるのであろうか。

672 木々生ふることなき山脈の奥がにも奥のごとくに大山の見ゆ
やまなみ おもはやま
 (「十二月六日」)

673 灰いろのひだを深めて見ゆる山とほりて澄みし空のかぎり
おほやま

斎藤茂吉に於ける「日常」の性位相 — 「遠遊」「遍歴」を中心として —

674 青き色つひにあらなくに空とほき寂しき山をけふ見つるかも
 (「〃〃」)

675 いただきのこごりし山がとほどほに聳えて雲の居ることもなし
 (「〃〃」)

676 黄に見ゆる砂丘のおほどかにつづきあて人のいとなむもの幽
けさ
 (「〃〃」)

677 山泉ありや否やおもふまでくろくろとして聳えわたれる
やまいづみ
 (「〃〃」)

678 かかる山を空のはたてに見るときぞ寂しきものかぎりぞお
もふ
 (「〃〃」)

「十二月六日」日付の小題でこの七首の歌が並んでいる。この期
 の茂吉短歌の原型は、今までみてきたように一応の完成歌および未
 完成歌の少々の歌とここにとりあげようとするこの七首の歌の原型
 — 実には「遠遊」「遍歴」の創作原型はここに全円的に徴表すると
 思うのであるが、にある。この日の日記からそれぞれの「遍歴」の
 歌に対応する原型部分を抄出すると次のようになる。

672 「アル處デハ黝く見エル小サイ連山ノ向ウニカスンデ夢ノヤウ
 ニ大山ガ聳エテキル」

673 「窓ノソトニ赤裸ノ山ガ見エテキル」「砂ガナダレテ無数ノヒ
 ダヲナシテキル處ナドモ見エテキタ」

674 「ソノ又向ウニ比較的ヒクク小サクテ鋭イ山ガゾット続イテ
 見エテキル、ソレガヤハリ如何ニモ荒寥デ一種ノ寂サガ領シテ

キル

675' 「アフリカ方面」のスケッチより)

676' 「砂原ノ黄ロイ上ニ直グ見エタリスルカラ寂シク大キク見えル」

677' (全体の記述の雰囲気より)

678' 「アラビヤノ方ノ山ハアル時ニハ海面カラ直グニ遙カ遙カに見エテキル。悠久ノ相デアツテソシテ寂シイ。ソシテ敵カニ人間ニセマツテ来ル」

672 673 674 676 678の五首は、それぞれ日記記事の素材が原型となつて生かされてきたものである。茂吉自身678の記事の後「ヤハリコレヲ歌ニスルニハ単純デ大キク、鋭クシヅカナ調べデナケレバナラナイ。ソレガ久シク歌ヲ止メテイタカラド、シテモ出来ナイ」(榜点筆者)といっているように、未だこの時点において「遍歴」の歌の完成はのぞめなかつた。だが茂吉がこの「日本帰航記」を綿密に望遠鏡までつかつて風景をうつし、日記的散文体にしたことは、この時点で少なくとも歌の原型——歌に発動する前の自分の心を客観的にとどめておこうという気持が潜在していたことを語っていることは確かである。茂吉自身「後記」で言っている「歌日記」とは実はこちらの「日本帰航記」の日記の方をさすものであらねばならなかつた。単なる日常をうつす日記というよりも「歌」にするための日記であり、人間・茂吉というよりも、歌人・茂吉がそのままの私たちでできるとみなされるのである。

677の歌は、この日記部分のどここというのではなく、全体の雰囲気から後年歌にしたものと思われる。

そして678は、この日記の中で茂吉が描いている「アフリカ方面」の山のスケッチから後年歌にしたものと思われる。
以上から茂吉のいう「整理」「増補」の意味をまとめてみると次の五つの位相よりなりたつ歌が構想される。

「帰航漫吟」
(百六十三首)

- (a) 一応の完成歌
- (b) 一部フレーズのみの未完成歌
- (c) 素材や語のつなぎ、合わせの歌
- (d) スケッチからの歌
- (e) 全体の雰囲気、その他不明の歌

こういうかたちで現在のところ実証できるのは「遠遊」「遍歴」においてはこの最後の「帰航漫吟」百六十三首のみである。あとは多少の「手帳」がのこっているだけで実証するにたる資料が無い。だが実はもう一つ「つゆじも」最後の「洋行漫吟」百七首が「手帳五」と対応し、これと同じかたちで実証できる性格のものであるし、又編輯時期も同時期のものと考えられる。

この「洋行漫吟」と「帰航漫吟」を(a)(b)(c)(d)(e)の分類にそつて調べ々々統計を出してみると次のようになる。

次の表をみてもあきらかなように、この期の茂吉の歌の原型の半数は、歌になる以前の茂吉の写生文(日記的散文体)によつていて(c)分類)。さらにそれに(d)分類の「スケッチからの歌」と(e)分類の「全体の雰囲気及び不明の歌」を合わせてみると「洋行漫吟」では、93.4%までがその時点で実際はつくられておらず、歌の回復がきざしはじめた「帰航漫吟」になつても72.9%あまりがそうであること

分類	歌集		完成歌 (a)	未完 成歌 (b)	つなぎ合 わせの歌 (c)	スケッチ からの歌 (d)	全体の 客員 の歌 (e)	トータル
	数	(%)						
「洋行漫吟」 「つゆじも」	4	(3.8)						
「帰航漫吟」 「遍歴」	17	(10.5)						
	27	(16.6)						
	79	(48.4)						
	11	(6.7)						
	29	(17.8)						
	107	(100)						
	168	(100)						

が解る。すなわち、「帰航漫吟」を除く「遠遊」「遍歴」の歌の原型も、この「洋行漫吟」と「帰航漫吟」の統計の振幅のなかに封じこめられてであると推定してもよさそうである。

三

以上のように実証してきて得た茂吉像は、昭和十六年のひと夏をつかって、実は箱根強羅の工房にこもり、大正十一年一月〜大正十四年一月におよぶ自分の過去の日記をみながら、せつせと歌になりそうな箇所傍線を引き、一日平均四十首前後の歌をつくりつてい
る老獪な茂吉の像である。それでは茂吉は何ゆえにそのような徒勞
ともおもえることをやってのけたのであろうか。岡井隆も「つゆじ
も」編纂への疑問をここまでよく追求してきながら、その八問▽の
前であらずんでいる。「わたしの推定によれば「つゆじも」は相当
の部分が、昭和十五、六年の日付けを持つ創作である。(実は「遠

斎藤茂吉に於ける八日常▽性の位相 — 「遠遊」「遍歴」を中心として —

遊」「遍歴」も同じ事情のもとに作られているが、今はこの点は触れない。() にもかかわらず、それらは、過去形で歌われることもなく、「追憶」という形の表題をもつこともなく、また、「のぼり路」や「霜」に含められることもなく、現在形で、長崎時代の既発表歌(A資料)の中に混入せしめられた。この辺りの操作の動機が、わたしにとつては、まことに判りにくい。(註文) (傍点筆者) すなわち、二十年前の作品が過去形でうたわれることもなく、「追憶」という形で表題もなく、二十年前の八自然▽と八自己▽とを二十年後の今、あるがままにまむかわせている茂吉の「操作の動機」への疑義である。

一つは、茂吉が過去の欠落している短歌の穴うめをしようとしていたことは確かだ。と同時に昭和十六年の夏の茂吉は一つの空間におかれていた。昭和八年末から六年余没頭してつくりあげた「柿本人麿」の業績に対して前年の昭和十五年五月十四日、帝国学士院賞が授与され、研究における一段落をきたしている。さらに妻との離別の間に入りこんできた永井ふさ子との関係が、昭和十六年七月二十九日の日記をみると「永井ふさ子、土屋君ニ懇へし由ノ手紙アリ、一夜会談ヲ欲シタガコトワツタ。敬天堂老人ノ「人外ノ魔」ナリ。今日ハンナコトデ何も出来ナカツタ。」と記してあるように、この日あたりを境に完全なる訣別がおとずれている。

茂吉はこの頃、歌の増補ばかりでなく、日記の増補にも積極的であった。この期茂吉はなぜか自己の過去の日々を対象化し、整理し、再編成する日々を多くもったのである。その熱心さたるやついには弟子の山口茂吉をして「去年ノ日記追加」と云ふのは丁

度、一年前の昭和十五年六月の日記の大部分を私(山口)の日記に據りつつ増補されたのであったが、私に日記を持つて来るやうにと云ふ先生の使が来たことはしばしばであつて、私の日記は先生のことを記した日には◎を附けて直ぐ分かるやうにしてあるが、その昭和十六年六月だけに就いて見ても、三十日中の十七日分が◎が附いてゐる計算である。^(註七)とそれからくりの一部分をいわしめたごとくその執着たるやフアナチックですらある。このフアナチックの極限が昭和十六年七月三日〜八月十日の間の箱根強羅の密室の工房でおこなわれた「遠遊」「遍歴」の歌の「整理」「増補」——実は完全な創作なのであるが、におもむかせた。

何ゆゑに茂吉においてこの期、日記の増補のみでなく短歌創作によるこのような穴うめが必要であつたかという、一言で言へば、この期茂吉をおそつたであろう△あはれ△の情のゆゑであつた。茂吉はこの一連の「遠遊」「遍歴」の歌をみてわかるやうに、けつして「赤光」「あらたま」時代のように気負いたつてはいない。過去の歌を再編成して文学的価値を高からしめようとも思っていない。単純に、自己の過去を対象化してあるがままに歌おうとの意図が如実にうかがえる。それは永井ふさ子との愛の挫折からくる△あはれ△であり、それに重なるやうにしておしよせてくる昭和十年代にはいつての日中戦争以降の^{ウルトラ・ナショナルイザム}国粹主義のもとでの、自らの△個△をなげ捨てて△公△のなかにおしながされてゆく時の△あはれ△の情でもある。第二次世界大戦をひかえたこの八月、茂吉は△あはれ△の対象化を「遠遊」「遍歴」でこころみ、「つゆじも」以降おそつたこの過去の十年間の、寡作の時期と短歌の穴うめと現在

の生活の空間の穴うめとをあわせて試みたのである。このことは、さらに編輯の所と編輯の時と編輯の方法の三つの関係性の上で総合的に論じなければならぬ。

所は箱根強羅の山荘の工房であり、

時は昭和十六年七月三日〜八月十日にかけてであり、

方法は日記にしたがつた忠実なる日常性の再編成である。

かつて箱根強羅で一山距てて夏をすごしたことのある折口信夫は「風物の変化の乏しい夏毎を籠つて、而もあれだけの量の作物を為して^(註八)」茂吉の作歌力に驚嘆をしめしながら、次のように評価したことがある。

「長い日のうちに、たゞ一度二度異國のをとめが用を達するため、どあを開いて聲をかけて来る。——かういふ人間接触も、歌にすることの出来る人は、少しは、あるだろう。併し、唯物もない水平線や流沙に向つて、倦んじ暮す大洋平原を心に活して詠むことの出来た人は、他に誰があつたらう。国境を越えて更に国境へ——長い鉄路の経験——唯もう漠々たる長沙を幾日も眺め暮す生活などは、座談にのぼすことすらをつくふな筈である。而も、それをちやんと、生活からかつきり切り出して作品にしてゐる。ほかに学問や歌に対する手柄はいろいろあるが、この一つは、よく我々の同時代人には、見取つておいてほしいものである。^(註九)」

こういつたとき、折口信夫の頭には、茂吉が昭和五年十月に満鉄から招かれ、わずか一月ばかりのうちに七百五首の「連山」の歌をものにしたこと、今問題にしている「帰航漫吟」の歌のことを頭においての発言であつたことがわかる。だが、この茂吉においてす

ら、この「帰航漫吟」の原型は先にしめした散文的日記の段階——歌になる前段階でおわつたものがほとんどで、この日記をもとにして「材をその時代にとつたというだけで」^{註(十)}実はこの昭和十六年の夏に箱根強羅の山荘の工房^{ラホラトリ}でつくつたものであることをしるべきである。

昭和十六年、茂吉は風雲急をつけはじめた状況の中で日常生活の転換にせまられていた。茂吉における△私▽の形而下の日常は非日常性の中にどんな後退し、△公▽の状況が茂吉の△私▽の状況をくいやぶつて日常化しつつあつた。そうした中で歌人茂吉は、いちはやく△公▽の状況に先どりされ、戦争歌人として△私▽の発想を△公▽に売り渡して歌わねばならなかつた。茂吉における絶対的対象たる△自然▽は、どんな侵蝕されて象徴的なる△神▽の位相へとおもむき、それがさらに現身神たる△天皇▽の位相にまで侵蝕されてゆく。茂吉の△私▽的な発想はどんな△公▽なる天皇にとられてしまい形骸化した戦争歌の瓦礫の山を欲すると欲せざるとにかかわらず築いてゆくのである。そうした中で、昭和十年代の茂吉は年ごとに△私▽の日常生活をうたうことに寡黙になつてゆく。△私▽の日常詠は△公▽的戦争詠へと侵蝕され、戦争歌人へとつき進んでゆくのである。こうした中で「遠遊」「遍歴」は未刊歌集「いきほひ」の戦争詠や第十四歌集「霜」の日常詠とパラレルにかかわりながら、より、日常性を回復するものとしてつくられてゆくのである。以上のような場所と時を得て成立した「遠遊」「遍歴」の編纂方法といえは「日記にしたがつた忠実なる日常性の再編成」につとめることを要とした。そして、その日記たるや普通の日記ではなく、

斎藤茂吉に於ける△日常▽性の位相 — 「遠遊」「遍歴」を中心として —

すでにして歌をつくるためのスケッチ、下書きであつたことは先にも述べた。二十年前、茂吉はヨーロッパにあつて「自然」と「自己」を一元化してうたうまでにはいたっていない。うたうべき「自然」は眼前にあつて平板なる対象物にすぎず、うたうべき「自己」もそこに観入しうるほどの詩情の奔騰もみられない。茂吉の創作主体の裡なる観察者は、ただ見るだけで受肉するまでにふかめることも出来ず、また茂吉の創作主体の裡なる幻視者も「自然」の奥底まで透視し幻視することが出来ないという、誠に詩人としては危機的状況の中にあつたのである。そうした稀薄さの中にあつても茂吉はあきらめず詩人としての基底をささえる記録のみは誠に熱心にのこしていたのである。昭和十六年夏、所は箱根強羅の山荘の工房で茂吉はその再現にとめる。すなわち、東京にあつて△公▽の状況と△私▽の歌に完全に侵蝕された片輪の茂吉が、二十年前の△私▽的、日記的△私▽（日常的△私▽）の徹底的な回復をこの工房で試みるのである。おろかなまでに△公▽にとられてしまつた戦争歌の裏返しとして、おろかなまでに△私▽をとりかえし、日常詠の回復にかける茂吉の全円的な姿がここにかんでくるのである。

いい歌をつくる、文学的止揚をはかるといった類のことばではどうしようもない日常性の回復の問題がこの編纂のうらにはかくされていたのである。六十代に達した老年の茂吉が、四十代の壮年のある日ある時を徹底的に回復する方法は、五七五七七の外的合概念性による韻律のなかに日記的文体（散文体）を忠実になげ入れるより他ない。主体をなるべく殺して、外的合概念性による韻律にかけることによつて、二十年前の△私▽の日常生活を回復しようとする茂

吉の△あはれ△の情がここからみえてくる所以である。茂吉において『遠遊』『遍歴』とは、極言すればあのながつたらしい詞書きのみで実はやかったのである。だがそのみでは過ぎ去ってしまった△私△の日常生活の平板な叙述にすぎない。茂吉において、その詞書きの後に置かれた一首一首の短歌が、現在——昭和十六年夏の時点において、徹底的に△公△の状況にうばわれつつある△私△の日常生活を、うばいかえし充足させてくれる意味である。

茂吉は二十年前の△私△の日記をかりながら、二十年後の昭和十六年のうしなわれた△私△の日常の回復を消極的ながら、こういうかたちではかかっていったのである。茂吉は表面上、この期あの膨大な量におよぶ△公△的発想を基底とする戦争詠をうたった。と同様、この期二十年前の日記をかりながら、うばわれつつある本来の日常的△私△の回復を、あの箱根強羅の山荘の工房^{ラボラトリー}でひそかに試み、精神のアンバランスの回復にひとりつとめていたのである。

註(一) 第三歌集『つゆじも』の最後にくっつけられた「洋行漫吟」(二〇七首)のみは、『遠遊』『遍歴』の編輯にひきつづいて昭和十六年八月十三日と十四日の両日の「日記」をみるかぎり、同方式で「手帳五」(新『斎藤茂吉全集』第二十七卷)にそって編輯されたと推定される。

註(二) 上田三四二『斎藤茂吉』(筑摩書房)。
註(三) 『書簡——大正十二年四月二十八日・平福百穂宛』(新『斎藤茂吉全集』第三十三卷)。

註(四) 岡井隆『茂吉の歌^{あるいは}つゆじも抄』(創樹社)。

註(五) 「日記——大正十四年一月三日」(新『斎藤茂吉全集』第二十九卷)。

註(六) 註(五)に同じ。

註(七) 山口茂吉『第四十九卷(日記四)について』(旧『斎藤茂吉全集』第四十九卷「月報」)。

註(八) 折口信夫「民族の感歎」(新『斎藤茂吉全集』第二十九卷「月報」)。

註(九) 註(八)に同じ。

註(十) 註(五)に同じ。

註(十一) 拙稿「斎藤茂吉・幻想論Ⅱ」(「宇部短期大学学術報告」12号)参照の事。

註(十二) 拙稿「斎藤茂吉・戦争論」(「近代文学論集」創刊号)参照の事。

〔補註〕 文中の「遍歴」の歌に附した番号は巻頭一頁目から便宜上、順次つけたものである。